

立川武蔵著

『女神たちのインド』

(せりか書房、一九九〇年)

森 雅 秀

女性がふたり立っている。ひとりは一〇代なかばであろうか、顔には少女のおもかげが残っている。腕をくみ、まぶしそうに目を細め、不安げにこちらを見ている。もうひとりの女性はすでに初老の域に入っている。よく日に焼けた顔の中でこちらをみつめるまなざしは、もうひとりの女性よりはるかにきびしい。腕には赤ん坊がだかれているが、髪をしばっているとところをみると女の子であろう。無邪気な視線をこちらに向けているのが母親とは対照的である。ふたりの女性はネパールの民族衣装を身につけ、はだいで立っている。背景はネパールの古都パドガオンである。ふたりの女性のあいだには少年が立っているが、女性た

ちのかけになって印象は薄い。

インド論理学からチベット密教まで幅広い専門領域で知られるインド学者立川武蔵氏による意欲作『女神たちのインド』の表紙には、このような写真が用いられている。本のカバー全体の地の色は、本の装丁にはめずらしい黒色で、中央にひし形のスペースがあげられ、この写真がおかれている。その上には本のタイトルと著者の名が赤い文字で浮かびあがっている。

『女神たちのインド』というタイトルから本書をヒンドゥー教の女神についてのイコノグラフィ（図像学）の本と考えるのはあやまりである。もしそうならば、表紙には人物ではなくアイコン（神像）の写真を

用いたであろう。実際、本書におさめられているアイコンの図版数が三百以上にもおおよぶことを考えれば、表紙にふさわしい写真をその中からえらび出すことはそれほど困難なことではない。

本書は「女性」とは何か、「母」とは何かを、インド世界の女神のイメージをてがかりに問いかけた本である。表紙の写真の女性たちは本書のテーマそのものなのである。そして著者自身はそのひとつの答えとして、人間を、あるいは世界を生み出す母胎でありながら、その一方で死や破滅へと至らしめるものと述べている。表紙の写真の三世代の女性たちは、誕生し成長しおとなになり、やがては年老いて死んでいくという人間の生のサイクルもあらわしている。彼らには著者の問いと答えの両者が託されているのである。

ところで、生類の生をつかさどるこのようなイメージは「時」とよぶことができるかもしれない。サンスクリット語で「時」をあらわすकालということは「死へと至らしめるもの」や「死」そのものを指し、

さらに「黒」という意味をもっている。そして「*Am*」の女性形であるカーリー（*Am*）こそ、インド世界の女神の代表として本書でしばしばとりあげられる神なのである。その名のとおり、黒い身体をしたカーリーは、血を満たした頭蓋骨の器をもち、血のしたたる生首を持つ。だらりとたらしした赤い舌はさらなる血を求めている。血の色、すなわち赤こそこの女神のもうひとつの象徴的な色なのである。

このように、著者の意図をいくえにも折りこんだ本書の表紙は、重層的なシンボリズムを読み取ることのできる一種の寓意画となっている（ちなみに写真をおさめた区画のひし形という形は二つの三角形に分解できるが、三角形も女性のシンボルとしてマンダラなどでしばしば用いられた図形である）。

本書は同じ著者による『ヒンドウの神々』（せりか書房、一九八〇、共著）や『曼荼羅の神々』（ありな書房、一九八七）と同じ流れに属する作品として、いわば「インドの神々」シリーズの第三作に位置づけることができるかもしれない。しかし、ヒンドウ

教の神々と神話を紹介した第一作や、ネパールの仏教図像を駆使して仏教のパンテオンを描き出した第二作と比べると、本書はいささかおもむきが異なる。

そのちがいを知るために、まず全体のあらましをながめてみよう。

冒頭におかれた五〇葉近くのカラー図版につづいて、序章では本書のテーマとおもなキーワードが示される。キーワードにはつぎのようなものがある。元型（アーキタイプ）としての「母」、素材（マター）、血の儀礼、聖なるもの、マンダラ、コスモス、中心と周縁。このうち、はじめの「元型としての（母）」がとくに重要である。著者はこれをユングから借りているが、女神や大地母神のイメージを、元型としての「母」が内容を得て顕現した結果であるのとらえている。そして、ぎやくにインドおよびネパールのヒンドウ教の女神や母神のイメージから「母」という元型がどのように内容を得るのかを考察しようとする（四三―四四頁）。さらに、インドにおいて母神や女神が血の儀礼と結びついていることに着目し、「素材」である「母」が、みずから生

みはぐくんだ「子」をいけにえに求めるという関係の「ねじれ」を指摘する。その一方で、人々を血の儀礼へとかりたてる「聖なるもの」のもつ強制力に言及することも忘れない。著者は女神たちのイメージをネパールのカトマンドウ盆地に求める。それは、中心と周縁がひとつの統一体——これはマンダラともよばれる——を形づくる女神たちのコスモスがこの地でもっとも顕著にあらわれているからである。

第一章「大地母神のすがた」では、インドス文明から説きおこし、女神を軸にヒンドウ教の神々とそのシステムを詳述する。本書に登場する主要な女神が呈示されるのもこの章である。すなわち、七母神（あるいは八母神）、ドゥルガー、カーリー、ヨーギニーなどである。そして、本来は別々であった複数の神をひとりの神に統合するメカニズムを紹介するとともに、土着的な神と汎インド的な神との共存を、大いなる伝統」と「小さな伝統」というふたつの伝統の存在に関連づける。

つづく第二章「カトマンドウの母神たち」ではカトマンドウ盆地に点在するヒンドウ

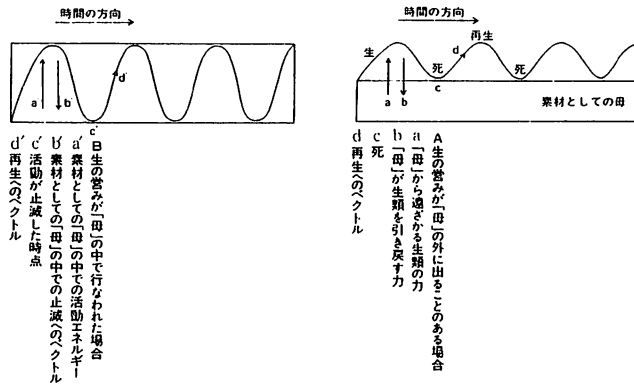


図1 素材としての「母」と生エネルギー (『女神たちのインド』188頁より転載)

女神の寺院をとりあげ、七母神あるいは八母神の配列と彼女らのイメージを記述する。これらの母神たちは、寺院のひさしを支えるほおづえ、寺院の本尊の光背、入口の上部にかかげられたトーラナ、寺院の天蓋などさまざまなところにあらわれるが、本尊であるカーリー女神などを「中心」とすると、つねにその「周縁」をかたちづくる。女神と血との結びつきに焦点をあてたのがつぎの第三章「血を飲む女神」である。血を好み、血を求め、血の儀礼を必要としたおそろしい女神のイメージがインドにおいて形成される。その代表例が「水牛の魔神を殺す女神」ドゥルガーであり、夫シヴァ神を踏みつけて立つカーリーである。著者はその背景に血の持つ宗教的な意味の変化を読みとる。聖と俗、浄と不浄という二種類の対立概念を用いて、本来、聖ではあっても不浄なるものであった血が、聖性を維持しながらも浄なるものへと変わっていったのである。ただし、その変化は単なる一方向的なものではなく、浄と不浄というふたつの極への分裂という様相をとる。そして、このふたつの相反するものあいだに

ある「落差」と、その両者の一致がもたらすエネルギーこそ、儀礼をはじめとする宗教実践が求めるものなのである。

著者が本書の結論とよぶ第四章「力としての女神」では、男神との関係から元型としての「母」を考察している。この場合としての「母」を考察している。この場合の力、すなわちシャクティは男神のエネルギーを示すと同時に、配偶神である女神を指すことばで、著者によって「生命体の活動エネルギー」とよびかえられている。男神のエネルギーが女神であるならば、そのエネルギーの活動の場、すなわち基体が何であるかが問題となる。女神崇拜がさかんになったヒンドゥー教後期では、この基体も女性で表象されるようになったと著者は述べる。これを説明するために上の図のよようなモデルを提供する。ユング的な図式とよぶ右側のモデルは、「生類は母から独り立ちしようとしては母に帰り、そして再生すること」を示している。これは、われわれの母のイメージに近いものである。これに対し、生のエネルギーも生の基体（「素材」も「母」であり「母」の中にある左側のモデルこそ、インド世界のいまだ「母」のイメージな

のである。女神崇拜が優勢であるかどうか、いかえれば活動エネルギーを活性化させるか止滅させるかは、エネルギーである。「母」を「聖なるもの」とみなすか「俗なるもの」とみなすかの違いによって説明される。

第五章「母神とバイラヴァ尊」第六章「女神たちのコスモス」は、女神とそのパンテオンの具体的なイメージを呈示することを主眼とする。第五章では、八母神とその夫であるバイラヴァ神がほおづえに配された寺院をいくつかとりあげ、彼らの図像的特徴と全体の配列を明らかにする。一方の第六章では、あるヒンドゥー女神寺院の構造が問題とされる。この寺院も八母神、バイラヴァ神のほおづえをそなえるが、それだけではなく、寺院の壁画にみられる死霊たち、入口周辺の低級神、本堂内部の女神たち、そして本尊ドゥルガーがひとつのコスモスを形成していることを描き出す。寺院内部で行われる儀礼の写真が紹介されているが、これは儀礼こそがコスモスに生命を与える行為だからである。

第七章「生と死を包む女神チャームンダー」は、これまでの第六章までとはいささか性

格が異なり、ニューデリー国立博物館が所蔵するチャームンダー女神の石像を題材としている。チャームンダーは八母神のひとつでもあるが、この像は単独の作品である。著者はこの作品に盛り込まれたさまざまなシンボリズムをていねいに読みとぎ、最終的にはこれらのシンボリズムが生と死に取れんされることを証明してみせる。これまでの章での考察の一種のケース・スタディとなることがわかる。

くりかえしになるかもしれないが、本書における著者のねらいをまとめると、つぎの三点に集約することができるであろう。

第一は、女神に視点をおいてヒンドゥー教のパンテオンの構造と機能を明らかにすることである。ヒンドゥー教のパンテオンが、ブラフマン、ヴィシヌ、シヴァという三柱の男神を中心に構成されていることは、比較的良好に知られているが、彼らの妃をはじめとする多くの女神たちが、どのような役割をになっているかは、最近まであまり論じられることがなかった。しかし女神崇拜を抜きにしてはヒンドゥー

教を、そしてインド世界を理解することはできない。インドス文明の大地母神を祖とする女神たちは、地域や時代によっては男神の人気をはるかにしのぐこともあるのである。

女神たちがパンテオンの中で整然とコスモスをかたちづくり、また男神の活動エネルギーとその基体になることはすでにみたとおりである。そして女神たちのコスモスは寺院の構造に投影され、その機能はヨーガの実践に反映されている。

第二のねらいは豊富な写真や図版資料を用いてインドにおける女神のイメージを描き出すことである。収録された図版の数は三五〇点にもおよび、多くの貴重な資料を含む。しかもそのほとんどが著者自身の撮影である。

アイコンばかりではなく儀礼の写真が多数含まれていることにより、われわれはインドおよびネパールの「聖なる世界」を追体験することができる。

本書の第三の、そして最大のねらいは元型としての「母」の普遍的なモデルの呈示である。これについては第四章の要約です

で述べたのでここではくりかえさないが、これこそが著者によるこれまでの二作と本書とを区別する最大の相違点なのである(ただし『曼荼羅の神々』の終章「聖化された世界・マンダラ」は本書の主題に直接結び付いている)。

つぎに評者が気になったところを二、三指摘しておこう。

まず、ユングの「元型としての(母)」ということばについてである。序章をはじめいくつかの箇所での語の定義はなされているが、元型についての説明が評者にはもう少し欲しかった。もともと、イメージをもたないものが元型であり、イメージを積み重ねることによって元型の内容を求めることが本書の目的なのであるから、それはむしろ当然なのかもしれない。思うに、著者自身、全面的にユングによりかかるとにはためらいがあったのではないか。実際、本書の結論部分ではユングはかげをひそめ、かわって「聖なるもの」と「俗なるもの」という、これまでの著者の作品になじみ深いことばが表面に出て来ている。

つぎに写真図版について。本書の表題が

『女神たちのインド』であるにしては、図版にインドのものが少ないと思う読者も多いのではないだろうか。たしかにヒンドゥー教の女神のイメージをもっとも豊富に伝えるのがカトマンドゥ盆地であり、本書におさめられた写真がその貴重な図像資料であることはまちがいないが、インド亜大陸からみればネパールが周辺諸国のひとつにすぎないこともまた事実である。インド国内の女神のイコンは、すでに『ヒンドゥーの神々』で紹介したという考えがはたらいたのかもしれないが、カトマンドゥに見出した女神たちのコスモスをインド文化圏全域に求めた成果を将来に期待したい。

本書全体の構成についてもひとこと述べると、第四章で一応の結論が示されたため、第五章以下の記述を理解するために第四章までの思考のながれにそのつどもどらなければならなくなる。これは第五章以下がかなり細かな記述に徹しているため、それまでの部分とはトーンが異なることにもよる。とくに、インドのチャームンダー像をあつかった第七章が、それまでカトマンドゥの女神のイメージを積み重ねてきた読者に対

して異質な感じを与えるのはまぬかれえないであろう。

とはいっても、本書が一般書の体裁をとりながらも学問的に高度な水準を維持しつつ、著者の思索の軌跡を示した書であることはまちがいない。日本ばかりではなく世界的にも未開拓なこの分野を、明瞭な問題意識をもって縦横に切りひらいていく著者の力量には驚嘆させられるというのがいつわらざる印象である。

さいごに表題について。本書のように、大名辞(インド)と小名辞(女神たち)を逆転させたタイトルを意図的に用いたのは、英文学者川崎寿彦氏がはじめであろう。川崎氏は『森のイングリッド』(平凡社、一九八七)の「あとがき」において、「(記号論的に)森(であるところ)のイングリッド」と読みかえるよう指示している(三二九頁)。本書でももちろん同じ読みかえが可能であるし、さらに「女神たちのすむインド」「女神たちによって象徴されるインド」あるいは「女神たちそのものであるインド」と読むことも可能である。この場合の「インド」の語が、インドを中心としネパールなどそ

の周辺領域を含むインド世界、あるいはインド文化圏と理解するならば、そこに住む人々にとって「インド」は「世界」や「コスモス」とほとんど同義語となる。そして、そこでは女神のみが「インド」という大名辞の前に来ることのできる唯一の存在であると証明することこそ、本書がめざしたものではないであろうか。

#### 参考文献

川崎寿彦

一九八七『森のイングランド』

平凡社

立川武蔵

一九八七『曼荼羅の神々』

ありな書房

立川武蔵・石黒淳・菱田邦男・島岩

一九八〇『ヒンドゥーの神々』

せりか書房

(研究協力者 名古屋大学文学部助手)

井上順孝・孝本 貢・対馬路人・中牧弘允・西山 茂編

### 『新宗教事典』

(弘文堂、一九九〇年)

#### 関 一 敏

一 事典の使命が、常住座臥でもとにあって使いやすいところにあるとすれば、その選択基準も一過性の書籍とは異なる。事典を名のる以上、まずそこには編集時点での知識水準が反映されており、できるかぎり多くの・バランスのとれた・正確で・有用な情報が、しかも効率よく集蔵されていなければならない。

ればならない。効率よくというのは、それらの情報がなんらかのインデクス(索引)によって重層的に取り出される簡便さをさしている。加えて、重さ、大きさ、厚さ、装丁、価格、活字等々、一般に使い勝手とよぶところの機能性全般がそこに含まれる。わたしたちが事典を購入するのは、これらの条件が多くの場合たがい矛盾するなか

#### 二

編者と執筆者はたいせつな判断の目安になる。たとえば民俗学には『民俗学辞典』(東京堂)と『日本民俗事典』(弘文堂)という代表的な二つがある。前者が一九五一年、後者が一九七二年の刊行であり、活字も後者のほうがはるかに読みやすく、収録語彙数も多い。となれば後者選択は必至ともい

で、それを優先させ、どこに目をつぶるかという選択的な判断にかかっている。だから、かりに活字や造本といった外的条件にふれないとしても、利用者の使用目的いかに事典の評価ははなはだしく変動する。事典にかんするひとつの評価方法は、日頃自分の親しんでいる事項がいかに記載されているかを、いくつかの事典・辞典にあたって比較することである。しかし『新宗教事典』の場合ほとんど類書がないので、比較は難しい。さしあたり、文化人類学、日本民俗学、宗教学、社会学といった関連分野の事典類を参照しながら、編者と執筆者、構成と内容、使いやすさ(機能性)等について考えてみたい。